京城新報

人の一生は重き荷を負ふて遠き道を行くが如し急ぐべからず

東拓人物評論（一）

小引　翠山

世の中は三日見ぬ間の櫻哉、堅氷積雪の時代はツヒゾ昨日の如く思はれしに今日は早や陽春四月花笑ひ鳥囀づるの時季とはなりぬ、思ふに昨年東拓會社が天下の輿望に叶ひ、議會の協贊を經て設立の事に決定するや、世人は一齊に之に望を囑して贊同措く能はず、之れ韓國開發の大使命者なり韓十三道の殖產興業は將來必ず此の大使命者に依りて振興作新するを得べし、韓國の事之より見るべきものあらんと喧稱せられしはツヒゾ今際の如く思はれたりしに今日は早や批難惡評の聲頻々高く、端なくも曩の期待者をして眉を顰め、首を捻らしめ、衷心轉た多少の疑を起さしむるに至りぬ、されど余輩は輕躁にも徹頭徹尾強ちに同會社に對する世人の批難惡評の聲に耳を傾くるものに非ず、何となれば事業の成敗と興亡とは或る歲月の行程を經るの後に非ざれば容易に之が最後の判斷を下す能はざるものあるを以てなり、さはいへ批難の聲は稱贊の聲に如かず、惡評の聲は好評の聲に如くはなし、卒直にいへば余輩と雖も此の批難と惡評との聲を耳にしては衷心轉た杞憂の念なきにしも非ざるなり

言ふ迄もなく東拓會社の使命たるや重且つ大宛かも九鼎大呂のソレにも比すべきなり固より會社の方針としては半ば營利的たるは敢て言を俟たざる所なれども世人の期待する所は會社の利益及び損失に拘はらず一日も早く韓國の富源を開發し、遺利を收拾し以て經濟的方面に韓國の生氣を蒲勃せしめ同時に邦人の韓國經營をして實際的に有効ならしむるにあり、思ふに之れ蓋し從來總裁宇佐川氏が諸所の宴席及び公會に於て幾度か敢て吐露したる胸中の希望も詮する所之に外ならざるなり

總裁宇佐川氏の希望既に斯の如し（會社の損失を不省とはいはず）然らば其の部下に隸屬する社員の希望も亦此と同一なるは敢て言ふ迄もなき所なり、否な總裁社員の希望は要するに會社の希望たるを思はゞ、會社は疑ひもなく將來此等忠實にして熱誠なる社員の哺育の下に其の發達を期せざるべからず、而して更に之が將來の發達を期せんとる會社は之等社員の手腕力量に依りて盛衰興亡共に之が人爲の運命に任さざるべからず、されど法は人に依つて活用され事は實力に依つて成立す、思ふに東拓社員の凡て否な多くは果して之が重荷に堪へ使命を全うするの手腕力量を有するや否や假令東拓社員にして唯單に會社の方針を遵奉し希望を確守して一意違算なからんことを維れ努むると雖も平々凡々何等手腕の以て見るべきものなく、力量の以て稱するに足るものなくんば亦何の用をか爲すべき、之れ畢竟するに碌々無爲の徒、今にして寧ろ勇退辭任するの優れるに如かざるなり、熟ら〳〵見渡す所東拓社員の顏振れは何れも高材逸足の士、鬱然として林を爲す、或は重望の以て他を壓するもの或は辣腕の以て人に誇るもの、或は才略の以て世に勝るもの、觀じ來れば何れ劣らぬ花●●●あやめの光景實に偉觀ならずとせず而も余輩を以て見れば之等多士濟々の中會社の適材良器として囑目するに足るの士果して何人かある恐らく五指を屈するに過ぎざるべし、而して余輩は之が社員の適不適と能不能とを觀察せんが爲め社員が從來に於ける性情行徑と敍述し併せて之が人物の品隲を試み以て聊か讀者諸君の一發を博せんとす、劈頭まづ余輩の筆端に落ち來るものは總裁宇佐川男彼れは果して其の職に適不適なるや、彼が性情行徑は如何に、乞ふ明日の紙上より現はるゝ所に徴せよ、

文苑

●非詩二章

非詩二章素より唯だ零畸兒の偶感のみ敢ねて詩と言ふには非る也（靈弦生）

○

多感なる兒は零落れて
今ま瀕陽の羈旅にあり
豪骨衆に說くべくば
社會主義者の大音を
吾鋼鐵のペンに彫ん乎

○

眠むれぬ夜半の徒然に
行李や探る　一振りの
劍はいまだ錆びねども
瓶裏の花の散るところ
孤燈の影の搖るところ
など我が腕の戰ふらん
なぞ我が胸の騷ぐらん



佐倉宗吾

（四十九）　眞龍齋貞水講演

宗五郎の退りました後で大和殿は、宗五郎が持參いたしたる願書を、篤と御覽の上、『此の如き次第なれば、なか〳〵一通りの事では、城代玄蕃は思ひ止まる氣遣はない』と、怜悧な人でございますから、先から前を見拔いて、『斯りや殿樣へ對し、能く〳〵御異見を致さなければ成らぬ』と、是から願書を懷中いたされまして、御前に御目通りを願つた、すると既う堀田上野介樣は、恐ろしき勢ひを以て、御控へに相成て居りまず、所へ罷り出まして 大『是は麗はしき態を拜し、恐悅に存じ奉る、さて今日、御主君が御登城あそばしまする折、御領分の百姓共が、門前に於て御駕籠脇に縋り、願書を奉らんとするを御聞き遊ばし、終に主君は御病氣と御屆け遊ばしたる段恐縮に存じ奉ります 上『イヤ惡い所の百姓共、予が日の登城を妨げなしたるに依て、斬捨てくれんかと存せしが、戶水六郎兵衞より、種々取做せしを以て、汝に取調方、申し付けたるが、何と致した 大『ハ、ハアー、唯今申し上げ奉るに依て、何卒この願書の次第、宜しく御聽採り下し置かれたく 上『フムーム何事ぢや 大『御國表にては、天秤一本に付きまして、烙印を捺し、是にて運上を取るのみならず、年二割增の年貢取り立、また桶桝を拵ね、上納米を引取るなど、御先代加賀守樣の御仁政に引換へ、誠に惡むべき壓制の致方でござる、恐れながら御主君は將軍家へ御奉公にて、御側を勤め給ふ御大役ゆゑ、御國表へ一度も成らせざるを以て如何に御一門とは申しながら、堀田玄蕃殿恐まの御政治なきにしもならず、此所は能く〳〵御諒承下し置かれまして、御國表へ御沙汰下され、御先代樣の御仁政に立戾りましたならば、定めし御領分の百姓共、主君を有難がり奉るでござる、申し上げる迄もなく、民は大切なものにて、恐れながら主君は御國換へ等まし是ありますにも拘らず、百姓共は其地に代々永住いたし、其君を主と親と賴みますものなれば、百姓は御主君い子も同然なる者でござる、寒風に肌を晒し、雪の日、雨の日も厭はず耕し耘りまするも、是みな主君への御奉公でございますれば、能くこの艱苦を御察し下され、聊か彼等の安堵いたすやう、御憐愍の御沙汰を願ひ奉ります』と申し上げた所へ川越播磨、老体なれども押して御目通りを願ひ 播『さて弱年なる大和へ、斯ばかりの大役仰せ付けられ、この播磨にも心添いたせとの御大命、冥加至極に存じまする、唯今大和より願ひ上げましたる通り、以來は御仁政を願ひ奉る』と申し上げた、そこで殿樣も少しばかり御分別になつたやうにも相見ゑました、現今の殿樣方は、學習院で十分の御教育がございますから、何事も能く御承知あそばし、却て殿樣の方が、御家來に御說き遊ばすやうに成つて居る、恐れ多い事でございますが、皇族樣方に在しても、やはり學習院に於て御修學あそばし、寒さ暑さの御艱苦を、一般の生徒と共に、御嘗め遊ばす位でございますから、御成人の後、よく物事を御察し下し置かれますから、今日の華族樣方には、失禮ながら家來の言ひ成り次第なんて御方はございませぬ、けれども昔の御大名は、御大名と書いて、ぼんやりと讀んだ位で、家來が彼樣あうばせ、斯あそばせと云へば、惡い事も善い事のやうに信じて居られる、或る殿樣が、御膳部へ鯛が附いた時に、鯛を殘らず召上つて、鯛の代りを持てと仰しやつた、そこで給仕の者が、其方を向いて御居あそばせと云ふさオウーと云つて向いて居らしつた、其內に鯛をヒヨイツと轉り反して、御代りが參りました、召上れと云ふと『ア然うか、斯りや結構だ』と云つて御食りに成つた、鯛が裏反しに成つた事に氣が注かぬ、現今の御大名方には、なか〳〵其樣な御方はございませぬ







